

蓋

中辻英恵

登場人物

女

蓋

店員

1

カフェあるいはバーの店内。バッグを抱えた女が座っている。人間の姿をした蓋が、女の連れであるかのようによびにいて、テーブルによりかかって眠っている。一人分の飲み物だけが置かれている。

以後、ト書きでは「蓋」が主語になっている場合は人間の姿をした蓋（俳優の演じる役）を、そうでない場合は物としての鍋の蓋（小道具）を指す。

女、バッグからスマホを取り出し、操作して耳に当てる。

女 出て、出て、お願い、……。出て出て出て……。出て、もしもし！ ……はい！ あはっ。 ……いや、出ると思わなくて ……ある、あるあるある、私ね。私、今、君んちの近くの、ほら一回連れてきてくれたお店、あの一、ああ、初めて君んち泊まったときだ ……そうそうそこ、に、居るの。それで ……違うからね。より戻そう的な話じゃなくて ……分かってる、だからそういうんじゃないやなくて ……君が来てき、よく来るって言ってたじゃん？ で、ばったり私に会っちゃったら嫌かなと思って。だから私が居るって、お伝えしておきます。 ……はい。え、待って？ ううん、待って、待ってって、ほんとは ……そんな話じゃなくて。

女、バッグを覗き込み、中から鍋の蓋を取り出す。蓋は目を覚ます。

女 ちよつと謝らないといけないことがあつて、

蓋 あれ？（あたりを見回す）

女 謝らないとつていうか、

蓋 うおつ、いっぱい居る！ 人？（女と客席を交互に指し）

人、人、人？

女 ……今、電話、大丈夫？

女、蓋をテーブルに置く。

蓋 ここどこ？

女（焦り、大きな声で）すぐ済むからっ！

女、他の客に見られているのに気付き、声を落とす。

蓋は女に向けられている視線を捉え、

蓋 あの、こんにちは、僕、あつ……

女 あのね……わざとじゃないの。ほんとに。わざとじゃなくて、持って帰っちゃったの。君んちのを……最後の、ときに。

蓋（女と客席を見比べ）一緒？ やっぱり、僕のこと……。

女 え、だから、その連絡なんだけど。

蓋も女も、しばらく自分の出方を考えているような間がある。やがて二人同時に、蓋は客席、女は電話に向かつて喋り始める。

女 君のものは君のものだし、そういうのきっちりしないと、つて言ったら、じゃあ電話するのはどうなんだってなるけど、

必要なことを伝えるために電話するのはただの事務連絡じゃない、仕事の電話とかと同じでしょう。なんかだから、そっちも普通に、ああそうなんだ、じゃあどうする？ つて反応してくれたいと思うんだけど。

蓋 誰か聞こえますかー、僕が喋ってるの。(女を指し)この人は、だめなんです、もうさんざん試したんです。でも、こんなに居たら……(大声で)人ー？ 人たちー？ 聞こえないのか。こんなに居ても、誰にも？ ……そういう感じで、人同士は、話す？ なんだよね。えー……あの一、でも、一人くらい誰か……(女の台詞が終わってから、女のスマホを指し)これは人じゃないけど。この向こうに、人がいるってこと？(女に問いかけるような口調になったのを誤魔化すように)……つぽいんだよな。

女 気づいてないの？ 無くなったのに？ 無いでしょう……蓋だよ、お鍋の蓋。

女、蓋に触れる。

蓋 僕の話？

女 もしかしてあれから使ってないとか……聞こえてる？ あるとき……もしもし？ 私、作ったじゃんシチュー。……それでどうできると思ってたわけじゃないけど……現に、ねえ……何の音？ ……うん、そう、無いでしょ。蓋。

蓋 蓋。僕のこと？

女 そんなゴソゴソやらないと確かめられない？ ……散らかってても、お鍋は台所に、

蓋 お鍋の蓋？ それが僕？

女 ……ダメ出しじゃなくて、こんなの、

蓋 答えろよ。

女 そうね、もう彼女でもないし。

蓋 僕の話してることは聞かないくせに、僕の話はするんだな。  
女 ごめんなさい。

蓋、わずかに期待を込めて女を見る。

女 こういところが嫌になったんだよね。

蓋、うんざりしたように顔を背ける。周囲を見て、

蓋 見られてるよ。

女 違う、ただの確認。どこが嫌になったか間違われてたら嫌  
でしよう？

蓋 (テーブルに向かって) ねえ、ここ、どこ？ (額をすりつ  
ける) 今、僕、君の上に乗ってるんだけど……

女 例えばよ、運動会サボって、それはバカ騒ぎが嫌いだから  
なのに、かけっこで負けるの嫌だからだろって思われたら、

蓋 (顔を上げ) 「うち」にいるこういうやつも、話しかけて  
も無駄だった。(天井を見て) ああいうやつも……もつと小さ  
いやつも、柔らかいやつも。この人も。

女 ……そうね……バカ騒ぎじゃないです、運動会は、

蓋 僕の話じゃなくなった。

女 ……はい……うん、……待って、蓋！ だから蓋をね、蓋  
を、返そうと思つて、

蓋 返す？

女 だからちよつと、出て来れない……急がなくていいから、

蓋 僕を？ 僕が帰る？ どこに？

女 ずっと待ってるから……それは、閉まるまでは、だけど……  
…閉まる前に来れるでしょ。

蓋 「うち」じゃないよな。僕の言う「うち」ってのは、さっ  
きまで

女 本当に！ うっかり持って帰っちゃっただけ！

蓋 あーもう！ 無駄無駄、

女 ……そう、蓋を……うっかりバッグに入れて。疑ってる？  
疑ってるよね？ いいよ。言いなよ、わざとだろって。

蓋 わざとだろ。

女 言わないんだね。……わざとだよ。必要なの。

蓋 僕が？

女 蓋じゃなくて、

蓋 ないのか。

女 希望が。

蓋 希望？

女 希望。もう一度会えるっていう。少なくとも最後じゃないっていう、……合鍵だって、ちゃんと返したじゃん、君、返せとか言わなかったけど、黙ってたら私がちゃんとするって、しなきゃいけないから困らないのか。君んちのおのって、君のそういうのさ、……え、いや、無いと困るでしょ？ 自分じゃ料理しないから困らないのか。君んちのお鍋だって、私を使うことのほうが多かったんじゃない？ くれるなら鍋もちょうだい。持ってきてよ鍋。最後のプレゼントに。蓋だけもらったって、何に蓋するの。

蓋 僕は、鍋の、蓋。鍋ってやつは、ここには居ない。

女 はあ？

蓋、女の大声にぎょっとしてから、周りの客に話しかける。

蓋 こっち見たついでに、ねえ、誰か

女 そう。私の口ね。

蓋 どうなってるのか教えてよ、

女 そのまま息が詰まって死ねばいいんだ、私なんか。そうい

うこと……あつ！ なんで！

蓋 なんでも僕はここにいて、誰にも僕の言うことは聞こえなくて……そうだ、聞こえないんだよな。

女、必死にスマホを操作している。蓋、女の様子が変わったのに気付く。

女 出て出て出て……出て、出てよ。出て出て……（以下、蓋の台詞と被ってもいいので、次に相手が電話に出るまで断続的に言い続ける。後の「出る」のときも同様）

蓋 まあ、この人に教えてほしいんだけど。（しばらく、出て出たと呟き続ける女を見ている）僕の最初に覚えてるのはこの人だし……

女 あつ！ あのさ、見送らないからだからね？ ……持って行けちゃったの。君が、見送ってもくれないから！

蓋 最初？

女 玄関じゃん、台所からすぐ、……そうだよ。こっち、見もしないんだもん。……そうだったよ！

女、周りの客に見られているのに気付き、気まずそうに背を丸める。

蓋 最初……は、そうだ。この人が赤い目をして、僕を見て、手を伸ばしてきて、暗くて柔らかいところに押し込まれて。

（バッグを見る）これか。

女 こっちは今、お店に居るの、大きい声出せないの、違う、切らないで……（舌打ち）クソッ。……出る、出る出る出る出る、出るよ、出る出る……

蓋 出てきたら「うち」だった。で、ここはまた「うち」とは違う場所。

女 もしもしっ！ ねえ、ごめんってば！！

蓋 この人が僕を見て、見たから、

女 聞いて、

蓋 僕は始まったんだろうか。

女 お願い！

女、蓋を掴む。蓋は身をすくめる。

女 切らないで……、

蓋 僕のステンレスの表面に、伸びたり縮んだりして、ぐねぐね揺れるこの人の顔が、映る。この人を、僕が、反射する、反射して反射して反射して……

女 だって、切ったら、終わっちゃうじゃない。

蓋 それは僕になる。僕は、最初に……僕がこの人を映していることに気づいた、そう気づいたときに、もう僕は居た、はず。だって気づいたのは僕なんだから。

女 最初から思い出してみてよ。

蓋 (ハッと女を見て) そっちがね！ 僕は今、まさに、すっごく頑張ってるから！

女 私たちこんなじゃなかった。ああ、だから、だからどうとかじゃなくてさ、戻れるとか思ってるんでもなくて、

蓋 そうだ、そう、僕に言ってるんじゃない……僕は僕で勝手に考えるよ、最初があって、最初の……

女 ただ……最後に一緒に思い出して。こんなじゃなかったってことを。

蓋 前は？

女 ……ここに来て。蓋を取りに来て。

蓋 最初の前は、僕はどこに居た？

女 可哀想だよ、お鍋と別れちゃって。寂しがつてる。

蓋 僕があ！？

女 引き止めないから。蓋渡したら、それで終わりにするから。

蓋 勝手なことやって！ 僕のことどうこう言う前に、僕の話  
を聞けよ！ 僕は可哀想じゃない。寂しがってもない。と、  
思う。と、いうか、それってどういうことかよく分からない。

鍋？ そいつがいないと、僕は寂しい？ 僕は鍋と一緒にい  
たの？

女 ちゃんと返すよ。分かってるよ。返したら終わり、分かっ  
てる。

蓋 ……最初の前は。でも、僕の最初の前に、僕は居るの？

女 だから、そのために来たんじゃない。終わるために来たん  
だよ。だから、ちゃんとするよ……、ちゃんと、

女、強く蓋を握る。

女 蓋だけでも、お鍋と一緒にしてあげたいんだよ。

蓋 でも僕の最初は、あなたなんだよ。

女 嫌味？ 嫌味だと思うの、これが？ 困るの、私だって、

君のこと思い出すようなもの持ってたくないんだから、……  
そうだよ、私が！ わざと！ 持って帰ったの！ だから返  
すって言うてるんじゃない。何がダメなの、キリがなくな  
かないです。これで綺麗さっぱり終わりましょうって言うて  
あげてるんですよ。そうだよ、終わらせたいのはそっちなん  
だから、……違うの？ 終わりにしたくないの？

女、ヒートアップするうちに、蓋を抱きしめる格好に  
なる。周りの視線を感じて、また縮こまって座る。

女 ……改めて言わないでよ。……聞いたけどさ。

蓋 もういいだろ。「うち」に帰ろうよ。また（バッグを指し）  
ここに入るから、連れて帰ってよ。僕は、最初の前なんか、



知らないんだ。知らないところに帰ったってしようがない。

女 来ないの？　なんで？　来ないの？　本気？　だってもう、閉まつちゃうよ、もう……だって、え？　だって、それで、蓋はどうなるの？　どうなるの、お鍋だって

蓋 知らない！　一緒に帰ろう。そう言ってるだろ。僕のことなんだから僕に聞けよ！

女 持つてくからね。もうだって、すぐそこなんだから。いいの、私が来ても。困るんじゃないの。来てほしくないなら来てよ。お願いだから。もう一度だけ顔が見たい。

テーブルに突っ伏す女。しばらくして顔を上げ、スマホを操作しようとするが、手を止める。スマホを置き、蓋を両手で持ち、話しかける。

女 切られちゃった。

蓋 話しかけてる？　僕に？

女 ごめんね、お鍋と離しちゃって。

蓋 だからそれはどうでもいいって。鍋だって、僕が話しかけても聞かないんだろ。他のみんなと同じで。あなたと同じで。

女 寂しいよね。

蓋 ……それ、僕に話しかけてるけど、僕に、話しかけてないよね。僕がここにいるって、本当には思っていない。

女 どうしよう、私、無理だ……、こんなの、耐えらんない、……なんでよ、蓋、返すだけなのに……ちゃんと、会って、終わりに……会いたかったのに……、

女、そう言いながら飲み物を飲む。しゃくりあげながら何回かに分けて飲み干す。と、待ちかねていたように店員が現れ、空になったグラスを持ち去る。

女 ……帰らなきや。

蓋 うん、帰ろう。

女、蓋を手取る。バッグにしまう前にもう一度、

じつと蓋を見つめる。

蓋 ねえ、僕はここにいるんだよ。映ってる。僕を見るあなたが。何回目だろう。百回目か、千回目か、一万回目になったら、聞こえる？ 僕の話が。

女、立ち上がり、蓋をテーブルに置いて出ていく。

蓋 えっ。

閉店後。店員が現れ、テーブルを拭いていく。蓋に  
気付き戸惑うが、とりあえず持ち上げて下を拭く。

蓋 なんだよ。

蓋、店員と、店員に拭かれるテーブルをしげしげと  
見る。店員、一旦蓋を置いて去る。

蓋 (テーブルに額を当てて)何、今の? ……(体を起こし、  
店員が去ったほうへ)おーい。人おー? ……ね。はいはい  
はいはい分かりました。

つまり……つまり、こういうこと……あの人は、どこへ行っ  
た? 僕のステンレスの表面に、映らないところ。しかも、  
僕に、話しかけないまま。僕に、気づかないまま、行ってし  
まった。それが僕は、なんだか……なんだか。

でも、分かった。僕、なんてものがあるから、駄目なんだ。  
僕は話しかけてもらえない。僕は気づいてもらえない。僕は  
……置いていかれた。という問題は、そもそも、僕がなけれ  
ば、ないわけ。だから……。

僕は蓋だ。「僕」を消すと……は、蓋だ。(首を傾げる)「は」  
を消す。蓋だ。(うなずいて)「だ」も消す……。蓋。蓋。蓋。

蓋は背筋を伸ばし、目を閉じ、口を嚙む。店員が再  
び現れる。

店員 忘れ物? やっぱり。

蓋 忘れ物? 僕は蓋だ。蓋。(反応してしまったことを悔し  
がる、ため息)

店員 えー、こんなの忘れる。

蓋 忘れたんじゃないと思うな。うつかりバッグに入れたんじゃないのと同じ。……ほーら聞こえない。教えてあげてんに。

店員、さっきまで女がいたところに座り、蓋を手にとって眺めたり、また置いてみたりする。

店員 この席いた人って……、あー？ うーん？

店員、思い出そうとしてみるが、そこまで熱心にもない。蓋を指の爪でコツコツ叩いてリズムを取りながら、小声ででたらめに歌い始める。

店員 ど、こ、か、ら、来ーたのっ、迷子の迷子の、ふーたっ！

蓋 (嫌そうに) わっわっ！ 何！ えっ！？ どこからって、

店員 おうちーを聞いても分からないー、

蓋 「うち」は

店員 なまえー、は、蓋か……、なまえーは蓋です蓋しかないー、ふったーふたー、ふったーふたー……、

蓋 どこからって、だからそこに……そう、戻ろうとしてたんだよ。「うち」にいたときよりも前、僕が始まる前。今、話しかけられるまでね！

店員 ふーたーで、ござんーすー、ひゆるるるるるーん……

蓋 僕が、こんなじゃなかった頃、僕が、とかもなかった頃、僕、なんてなかった頃に。戻れるはずだろ？ だって、こうなる前はずっと、そうだったはずで……。だからもう、何にも言わないよ。どうせ誰にも聞こえないんだから。こうするんだ。

蓋、目を閉じ、耳を塞ぐ。息を大きく吸い、止め

る。店員は歌うのをやめ、蓋を見ている。蓋、がま  
んしきれず息を吐く。

蓋 なし、なし。今のなし。……戻るんだ。僕、なんて、あつ  
たつて、いいことなんか何にもない……

蓋、今度は普通にふてくされて居眠りでもしている  
ような体勢で目を閉じる。店員、布巾を取り出し  
て、蓋を拭き始める。蓋、反応しないように我慢し  
ているが、やがて笑いを漏らしはじめる。

蓋 (店員が蓋を拭くのに合わせて) んふつ。ちよつ、やめ、  
あつ、ひひひひ、おーつ、んふつふつふ、あはははは、あー  
……終わり？

店員 もつとピカピカにしたいな。

蓋 え？

店員 店長、

店員、蓋を掴んで立ち上がり、店の奥へ向かって呼  
びかけながら去っていく。蓋も、店員のあとについ  
て去る。

店員 店長？ なんか、磨くやつってあります？ 金属磨くや  
つ……

女がテーブルに向かって座っている。店員と蓋が現れる。店員が蓋と飲み物をテーブルに置き、蓋が女と向き合って座る。女が店員に軽く会釈し、店員は去る。女、蓋を見る。

女　なんか、綺麗になった？

蓋　なつたよ！ ……磨かれちゃった。

女　元からこんなだっけ

蓋　痛かった！ 正確に言うのと、痛いつてこういう感じなのか、という感じがした。 ……まあ、だから、痛かった。痛い目にあつてたんだよ。 ……どうしてた？

女、蓋を眺めながら飲み物を一口。

蓋　僕を、ここに、置き去りにしてから。

女、スマホを取り出して、飲み物(を持った自分の手)の写真を撮る。画像を確認し、撮り直す。それは、テーブルの上の蓋がさりげなく入るような角度でもある。  
蓋、女のスマホの前に顔を突き出す。撮り終えた女がスマホを操作している間、

蓋　僕はまず、こう、ピカピカになって。されて。ピカピカに。それからは、ずっと ……ここにいた。あつちのほうにね。僕みたいなやつもいたし、僕みたいなやつは、鍋っていうやつ？ みたいなやつ？ の上に載ってた。(女の飲み物を指し) こういうやつはいっぱい居てね。僕、一応、気をつけてたんだよ ……誰かが、あのとときの僕みたいに突然、ここはどこなんだ、自分は何なんだってなるかもしれないから。誰か答えて

くれたって……そしたら僕は……言ってるんだ。

ああ、落ち着け、落ち着くん。最初はわけが分からないよな、でも大丈夫。人たちが自分をなんて呼んでるか、聞いてみな。僕はそうした。それで、僕が何なのか、分かったんだ。あ、でも僕、君がなんて呼ばれてたか知ってる気がするな。君は確か(女の飲み物に向かって)……「グラス」？ じやなくて「ドリンク」……「ゴチュウモン」……？ (咳払い) これから分かればいいんだよ。君が自分で見つけるんだ。よろしく。僕は蓋。

(女の飲み物を睨み付けてからフィと顔を背ける)なんてことは、起こらなくてね……(女のスマホを覗きこみ)これ、僕？ ……何してるの？ ……いいよな。何かできて。自分で、自分の、思うように動けて。

女、スマホを置く。蓋を手に取り、バッグに入れようとする。が、女の持っているバッグは、1のときよりも小さい。

女 あー、きついカー、

蓋 ほんとに、何してんの？ ……迎えに来たってこと？ ほんらさつき僕を連れてきた人が、あの人に僕、磨かれたんだけどね……言ったんだ。「お迎え来たよ、よかったな」って。連れて帰ってくれるの？ ……僕、これには入れないよ。

女、蓋を頭にのせる。

蓋 え、何何何。

女と蓋、シンクロした動きで首を巡らせ、周囲を見渡す。女、他の客と目が合い、恥ずかしくなって頭から

蓋を取る。

蓋 今のつてどういうこと？ え、まさか！ え、(女を指し)  
鍋、つてこと、ではない、人だもんな……、あ、なりたい？  
なりたいつてことか、鍋に。なりたい？

女が蓋を見る。

蓋 ……ちよつと、ピカピカになった？ あなたも。ピカピカ  
は違うか。ステンレスじゃないもんな。……うーん、でも、  
なんか、変わったよね？

女、蓋の持ち手を下にしてテーブルに置き、独楽のよ  
うに回す。

蓋 ああつ！？ す、すご、じゃなくて、待って待って、(再  
び回され) うわーっ！

女、笑う。

蓋 ……それ、初めてだ。あなたの、えーと、表面の？ そう  
いう形？ つて、言い方は、多分違うんだよな。いいか、ど  
うせ聞こえないんだから。(女にしばし見とれる、間)……そ  
れ、どうなって、そうなるの……？

蓋、女の両頬に向かって手を伸ばす。女のスマホが震  
える。女が手に持っていた蓋をテーブルに置き、蓋も  
手を下ろす。スマホを見る女。

女  
あ。



蓋 どうしたの？

女、蓋を見る。

蓋 え、

女、蓋をスマホに被せる。

蓋 (やや濁声になり) ヴあつ？ 何だこれ、ヴえ？ ……あ、

スマホの振動、止まる。女、そろそろと蓋を持ち上げ、  
スマホを自分のほうへ引き寄せる。蓋、自分の腹を触  
りながら、

蓋 今の、何か、へへっ、何、変な感じだった

再び女のスマホが震える。固まる女。

蓋 もう一回、ちょっと、やってみたいんだけど、

女 出て、出て、出て出て出て…、出て

蓋、口を嚙み、女とスマホを交互に見る。

女 (小声でブツブツと) 出て、出て出てって、あのととき、私  
は……ずっと、出て出てって、(スマホを手に取り、操作し  
て耳に当てる) ……はい。……そうね、出たけど。

蓋、身を引いて女を眺める。

女 久しぶり。……今？ 今は、そう、うん、居る……けど、

なんで。別に……飲んでるだけ。

蓋 ねえ。聞こえないー？

女 ……来なくていいよ。意味分かんないんだけど。

蓋 聞こえないーい、ずーっとずーっと聞こえない……。

女 インスタ？ さっきのやつ？ 早。違……いや、まあ……、はい。そうなのかもしれない、です。君が見るかもって思ってたのかも、思ってしまった、はい。でもそれってね……それって、もう、ここまで来たら、そういうのは……だからなんかその、もしかしたら君が見てて、とか考えちゃうのはさ……考えちゃうけど、それは、こう、習慣っていうか、癖っていうか。甘いもの食べたあと、しばらく口の中が甘いみたいな、違う、でもなんかそういう……実質？ は、無い、感じなの。だからマジで……見てたのか……（少し笑う）みたいな感じ？ 元気だよ。だいぶ元気になった。

蓋 なった……「元気に」……（ひらめいて）ピカピカ！

女 だから来なくていいって。

蓋 人は元気になる。蓋はピカピカになる。

女 あのとときは！

女、つい大きな声を出す、すぐさま周囲をうかがって落ち着きを取り戻す。

女 ……必死だったんだよ。あのととき、私、ほんとにほんとに、必死だった……。よくなかったと思う。迷惑かけたと思うよ。でも、（蓋を手に取り）君に、最悪でも、あと一度は会えるっていうのがないとき……今じゃない。もう今は、その一度のときじゃない。分かんないかな。

蓋 分からない。……僕に聞いてるんじゃないのは分かる。けど答えてやる。分からない。分からないことばかりだ。

女 ……会いたくないわけじゃない。会いたくないわけじゃない

じゃない。でも、……来ないで！ もう、一杯飲んだら帰るよ私。今日は蓋、取りに來ただけなんだから。……蓋。そう、さっきのねインスタ……映ってたでしょ、そう……置いて帰ったの、あの日。

蓋 それ。

女 君が取りに來ればよかったじゃない？ あの日にね、今日じゃない。

蓋 それだ、一番分らないのは。なんで置いてったんだよ。

女 あの瞬間まで、好きな人のお鍋の蓋だったのが……私を、傷つけた人のお鍋の蓋になったから。

蓋 ……僕は僕だ。ねえ、それ、もっと分からないよ。僕は僕だろ！

蓋、声を荒らげる。続く蓋の台詞の間、女は電話の相手の話に耳を傾け、時折やや否定的な「えー」「でも」「うーん」といった相槌を挟んでいる。

蓋 僕は始まってしまって、始まってしまった僕を、どうしたらいい？ 動けなくて、こうやって話しても誰にも聞こえないくて、なのに僕は終われない。なんでだか、終わらない。磨いてピカピカにしてもらっても……あなたは映らなかった。あなたのほかの……世界？ を、僕は反射してた。しようなんて思っていないのに反射して反射して反射して、あなたから始まったはずなのに、あなたなしの僕が、続いてきた。

僕を磨いてくれたあの人が、ときどき言うんだ。「迷子の蓋くん」って、「迷子の蓋くん、お迎えが來たらいいね」って。同じだよ、あなたと。僕に話しかけてるってわけじゃない。分かってるけど、それでも僕はいつも、そう言われたら、いつも、うんって……うん、って、言わずにいられなかったんだ。

女 でも私、これ飲んだら帰るよ。帰るから……なんで今頃そんな……、私は……君が連絡してきたときだけ、パツて、ここにいるみたいなの……起動するみたいなの？ そういうの、じゃ、ないんだよね。人間ってそういうんじゃないじゃん。……って言うけど、ほんとに分かってる？ 君が私を見てくれない間だって、私はずーっと……息をして、いろんなこと考えて……そこにずっと、居たんだよ。

蓋 (ためらいつつ)……僕も

女 えっ!? ……出た? え、待って!

女、スマホを置く。落ち着きなく自分の身体を見下ろし、髪を撫でつける。蓋に向かって、

女 来るって。どうしよう。

蓋 僕に聞かれてもね!

女 お鍋のところに戻る?

蓋 ……その、鍋ってやつのこと、ほんとに知らないんだよな、僕。ってことは、僕は、僕なんてもものない時間を……過ごしてきた、ってことだよ。あなたがあんなふうに見る前は。僕をそこから連れ出す前は。だから、置いてかれたとき、僕は、そのころに戻ろうって思ったんだ。でも、戻れなかった。

女、立ち上がる。蓋は焦る。

蓋 行くのっ!?

女 どうしよ、どうしよ、どうする?!

女、テーブルの周りを一周して、我に返って周囲を見、座り直す。

蓋 行かないですよ。あ、違う、行ってもいい、どこにでも。でも僕も連れて行って。もう……やめてくれよ、置いていくのは。僕ずっと、ずっとね……ずっとだよ……ずっとこの、僕のこのまるい縁の、ギリギリのところにも、映った何かが動くたび……あなたなんじゃないかと思つて、もう今にもあなたが、あなたの顔が、僕の真ん中の黒いところの近くまで来て、そう、こんなふうに、今みたいに……僕を見るんじゃないかって……

ああ、だから、そうだったんだな今。めでたしめでたしだ、きつと。……多分。まあ、だって……僕が何を言つても、あなたには……あなたがまた、立ち上がったたら、出て行ったら、僕を置いていったら……僕にはどうしようもない。

僕は、なんていうか、余分なんじゃないかな。居ないはずなんだよ。だってそうじゃなきゃおかしいだろ。こんなにくうしようもないなんて。あなたにも、誰にも、僕の話が聞けないなんて、あまりにも……だからやつぱり僕ってやつが、なにかの間違い、みたいなものなんだ。そう、それだけのことで……本当は、ここに蓋があるだけで、僕が居るわけじゃないんだと思う。ね……だから僕は……でも、じゃあ、こういうことを思つてる僕っていうのは……え？ ちよ、

女、蓋を手に取り、もう一度バッグに突っ込もうとする。  
入らない。

蓋 無理だつて！

女 やつぱり、ちよつと、大きくなった？

蓋 なわけないだろ

女 なわけないか。

蓋、女を見る。痛々しいほどの期待を込めて。

蓋 ……ねえ……本当に、聞こえない……んだよね。ねえ……  
(どんだん声が大きくなる) ねえ、ねえ、ねえ！

もちろん女には聞こえない。蓋が喋っている間、女は何度かに分けて飲み物を飲み干し、蓋を胸に抱え、息をつく。もう一度、吸って、吐く。蓋も女に合わせて深呼吸する。

蓋 落ち着け、落ち着くん。最初はわけが分からないよな。  
僕は……僕の最初はもう、過ぎてしまったのに……僕だって、まだ、全然……わけが分からない。

蓋、深呼吸を繰り返し、だんだん落ち着きを取り戻す。

蓋 分からないんだ……。

蓋と女がそれぞれの、てんでばらばらの物思いに沈んでいる。息を吸って吐くリズムだけがぴたりと合っている。やがて、蓋は再びぽつぽつと話し始める。

蓋 僕は、僕になって……僕ってものが、あつて、よかつた？  
……僕がよかつたって思ったら、よかつたことになるのかな。  
それしかないか。誰も……僕のこと、僕がここに居ること、知らないんだから。

女 うん。

蓋 僕が自分でそう思うしか、ないよね。

女 うん。

蓋 その、うんっていうのも、違うんだよな。

女 やつぱり、今、会えない。会い……会っちゃ駄目だ。同じ  
ことの、繰り返しじゃん。(蓋に)ね! だよね!

蓋 (力が抜けたように少し笑い)だから、僕に聞かれても。

女、蓋を抱えたまま立ち上がる。蓋も同時に立ち上がる。女は空いている手でスマホをバッグにしまおうとするがうまくいかず、一回バッグを置くことになる。

蓋 さつきみたいに、上に載せてもいいよ? あれ面白かった

女、動きを止める。おそろおそろ振り返り、すぐに顔を伏せる。

女 早いつて……、

女、蓋を仮面のようにして、顔を隠す。

蓋 え? あ? お? よし、よしきた、はい? はい。

蓋、女の前へ出て、女を守るように周囲を見渡す。

蓋 じゃあー、なんだ? どこからでも、かかってこい! じゃなくて? えっと……。 (背後の女に語りかける) ……僕、居るから。何にもできないけど、とりあえず、居ることにする。まあ、居なくなることも、自分じゃできないみたいだからなんだけど……、

女、蓋を持った手を下ろす。蓋、座って、女の顔を見上げる。その視線は偶然にも、蓋を見下ろす女の視線と交わっているように見える。

蓋　ピカピカの……ままでいて。ピカピカじゃなくて、えっと、元気、だっけ。僕はここに居て、あなたが……元気だったり、そうじゃなかったりするのを知ってる。それは、何にもならないことだけど、別に、あなたのためでもないんだけど……僕は、知ってる。ここに居る。

女、顔を上げる。蓋も女の視線を追う。女はやや強気の微笑みを浮かべ、蓋は腕を組んで相手を見つめる。  
暗転。

おわり